

N. Hawthorne の短編における「孤独」の考察

長岡政憲

Hawthorne の短編の中で、人間の孤独や孤立の問題を扱っている作品がいくつも見られ、孤独の状態が宗教的な罪をはらみ、周囲の人間との絆を断ち切り、自己喪失を招くという展開を見ることができる。Hawthorne の短編の中からいくつかの作品を選んでその展開を考察したい。

まず、“Roger Malvin’s Burial” だが、Hawthorne はこの作品で史実に基づいた記録を辿り、具体的な事件を題材にしている。この短編は年刊誌 *The Token* (1831) に掲載され、1843年の8月、*the United States Magazine and Democratic Review* に再版されており、その後 *Mosses from an Old Manse* (1846) に収録されたのである。作品の冒頭で、“One of the few incidents of Indian warfare naturally susceptible of the moonlight of romance, was that expedition, undertaken, for the defence of the frontiers, in the year 1725, which resulted in the well-remembered ‘Lovell’s Fight’”⁽¹⁾ とあるように New Hampshire に近い Maine 州の南西部で Pequawket Indian の待ち伏せによって襲われ、Captain John Lovewell を中心にした熾烈な戦いの結果、33名中12名の死者を出した。生存者は逃れたものの、数名の重傷者はとり残され、途中で息絶えた者の遺体は埋葬されなかったのである。その戦闘の場所は、今は Fryeburg と呼ばれており、その場所の近くの Maine 州 Raymond で少年時代を過ごした Hawthorne はその事件をよく聞かされたのであろうし、彼が Bowdoin College の4年の1825年に、この戦いの Fryeburg 記念祭があった時には、同級の Henry W. Longfellow が100年祭の叙情詩を朗読している。Lovewell’s Fight については、Hawthorne が読んだと思われる New England の歴史の書物に記録されており、Hawthorne が“Roger Malvin’s Burial” に織り込んだ記述については三つの資料を参考にしたと考えられる。すなわち 1725年 Thomas

Symmes によって書かれた *Historical Memoirs of the Late Fight at Pigg-wacket*, それから二人の重傷者を悲劇的に語り歌った Thomas C. Upham のバラード, そして二人の負傷兵の別れを描いた “Indian Troubles at Punstable” を参考にしたようである⁽²⁾。“Roger Malvin’s Burial” は1804年生れの Hawthorne であるから, 彼の若い頃の作品でありながら, 暗い宿命観が強く漂っている結末となっている。

さて, まず作品を辿ってゆくと, Lovell’s Fight の戦いで重傷を負いながら, 荒野を三日間さ迷い逃げて来た二人の兵士, Roger Malvin と Reuben Bourne は荒野の中にある巨大な墓石のような岩の足もとの枯れ草の上に疲れ切った体を横たえたまま, 朝の陽光を迎える。中老の Malvin は深手を負ったために体の衰弱がひどく, 自らの命が二日と持たず, 死が近いことを悟る。若者の Reuben は実は Malvin の娘の婚約者であり, Malvin は Reuben に彼の体力がまだ残っているうちに, 自分をそのまま置いて逃げ延びてくれ。そしてキャンプ地まで辿り着いたら自分の遺体を埋葬しに戻って来てくれるようにと悟す。Malvin は娘の Dorcas への言い残しの言葉として, Reuben は負傷してひどく疲れていたけれど, 自分の父親のように仕えてくれた。今後は父親より Reuben の方が大切な存在になり, 二人の幸福を祈っているというものであった。Reuben は Malvin の側において臨終まで見守りたいと言ったものの, Malvin の説得を受け入れ, 食料となる草や木の根を Malvin の側に集めた後, 必ず Malvin を助けに来るか遺骨を埋葬しに戻って来ると約束し, 血のついたハンカチを若い樫の木の先端に結びつけ, その血に約束を誓ったのである。

Reuben は自分の行動は正しいものだと半ば確認しながら, 自分に残された体力を頼りに Malvin を置いて出発する。キャンプ地に向かった Reuben も途中で力尽きて倒れ, 通りかかった救援隊に助けられ, 運ばれたキャンプ地で Malvin の娘の Dorcas に手厚い看護を受けることになる。看護の甲斐あって意識をとり戻した Reuben に彼女は父親の安否を問われる。負傷しながら三日間荒野でのさ迷いと Malvin の体の衰弱を告げただけで, 父親の死を知った Dorcas は Reuben に, “You dug a grave for my poor father in the wilderness, Reuben?”⁽³⁾ と詰問してくる。彼はベッドの上で Dorcas から身を引きながら, 自分は Malvin の死が確かなものになる前に, 立ち去って生き延びたいという願望があったことを内に秘め

たまま、彼女の問いかけに対し、“My hands were weak: but I did what I could,” . . . “There stands a noble tombstone above his head: and I would to Heaven I slept as soundly as he!”⁽⁴⁾ と言って切り抜ける。彼の言葉には表面上の偽りは無いけれども、事実を包み隠し、Dorcас の問いにまともに答えなかったため、彼女には Malvin の墓を掘って埋葬したかのような印象を与えてしまう。しかし Reuben にとっては打ち消すことのできない自己欺瞞となってしまうのである。当時の民話やインディアンの風習にも死者を葬る重要性が語られており、生者が死者を葬る義務感が確実に Reuben の罪意識を深めたといえよう⁽⁵⁾。

安らかに埋葬された父親の永眠を信じ、Reuben の勇気を讃える人々の祝福に囲まれた Dorcас は Reuben と結婚することになる。Reuben が最も愛し、信頼している Dorcас に真実を隠している人間的弱さについて、Hawthorne は、“He regretted, deeply and bitterly, the moral cowardice that had restrained his words, when he was about to disclose the truth to Dorcас:”⁽⁶⁾ と述べており、自分の自尊心、彼女の愛を失う怖さや人々の彼に対する称讃の声等によって、自分の偽りを修正し得ない臆病に彼は苛まされる。時として彼は Malvin を殺したかの如く感じることもあり、埋葬されない Malvin の死体が荒野から誓った約束を果たしてくれるように、自分を呼び求めている声が聞こえるとさえ思い込むようになる。この様子を Hawthorne は、“His one secret thought, became like a chain, binding down his spirit, and, like a serpent, gnawing into his heart;”⁽⁷⁾ であるとしている。つまり彼の心に喰い込んで苦しめる蛇とは隠された罪が邪悪な力を帯び、彼の魂を苦悩させる様相を表わしている。*The Scarlet Letter* の冒頭で、処刑台に赤ん坊を抱いた Hester を群集の中からじっと見つめていた夫の Chillingworth の顔の上を、蛇がとぐろを巻いた姿を見せたという表現があるが、あの瞬間 Chillingworth の運命が悪魔のものになったのである。Reuben の場合、Waggoner が、“From one point of view not sin but refusal to acknowledge sin drove to his doom”⁽⁸⁾ と明確に述べているが、Malvin と Dorcас の肉親の強い絆の間で、Reuben は時が経つにつれて Malvin を埋葬しなかった事実と、自らの虚偽を Dorcас に告白する勇気を持たず、秘密のままにしている罪意識が彼の運命を決定づけてゆくことになる。Arne Axelsson が、“In ‘Roger Malvin’s Burial’, Hawthorne

has shown how guilt can isolate an individual even though it may have little or no objective cause”⁽⁹⁾ と述べているように、Reuben は暗い陰鬱で孤独な、また自己嫌悪からいらいらした人間と変ってゆく。Hawthorne が、“... for Reuben’s secret thoughts and insulated emotions had gradually made him a selfish man”⁽¹⁰⁾ と述べているように、罪意識の故の孤立によって彼の人間性が失われてゆく。結婚後数年で譲り受けた農場経営も不振となり、隣人とも口論を繰り返すようになり、ついに破産する破目となる。その結果、15才になった最愛のひとり息子の Cyrus を連れて三人で居住地を離れ、辺境の地に開拓生活を求めて荒野の森に入ってゆくことになる。Cyrus は美しい少年だが荒野での開拓生活には慣れており、Reuben は Cyrus に導かれて森の中に狩りに出かけてゆく。ちょうど18年前の5月12日に Malvin を荒野に残して去った Reuben は、超自然的な声が彼をこの同じ荒野に呼び寄せ、神が自分の罪の償いをさせる機会を与えるのではないかと考えるようになり、獣を撃つ狩人のようではなく、夢遊病者のように Cyrus の誘導から離れて荒野を歩き出してゆく。この荒野で長い年月の間埋葬されず野ざらしになっている Malvin の遺骨を見出し、土をかぶせて埋葬できればと考えている最中、茂みの影の物音を獣と思い、誤って息子の Cyrus を銃で撃ち殺してしまう。その場所は18年前、Malvin を残して去って行った場所だったのである。彼が18年前に血のついたハンカチを枝に結んで誓いをたてたその樅の木は幹の部分は茂っているのに、ハンカチを結びつけた木の先端の部分はそこだけが枯れた状態になっていたのである。さて、Reuben が最愛の Cyrus を殺したことについて、Newman は、

Hawthorne effectively uses the figure of shooting through a veil when he has Reuben shoot at something moving behind “a thick veil of undergrowth”; the game that Reuben had wandered in search of is his own cowardly falseness, which had been hidden from him by a thick veil of self-deception.

The two major symbols in this story are the oak tree and the rock; ... The oak tree is identified with Reuben physically and psychologically. ... Eighteen years later, both man and tree are blighted, the oak, in its

“upper part . . . the very topmost bough” where the handkerchief had been tied, and the man in a similar “upper part”, that is, in his soul or mind, where his vow to Malvin is indelibly marked.⁽¹¹⁾

としている。彼が銃で撃ったものとは Cyrus というよりも、むしろ自己欺瞞に包まれていた自らの臆する心の虚偽であったと。更に榎の木は Reuben 自身の象徴として描かれ、彼が誓いによってハンカチを結びつけた枝の部分は Reuben の失われた心と同じように枝れてしまっていたと述べているのである。イザヤ書 1 章 30 節には葉の枯れた榎の木が恐ろしい滅びの審判を表わしていることが書かれている。

Dorcas が息子の死を悲しみ嘆き、大声で泣いた瞬間、榎の木の枯れた先端の枝が墓石のような岩の上に、Reuben, Dorcas, Cyrus, そして Malvin の骨の上に落ちてくる。Hawthorne は最後に、

Then Reuben's heart was stricken, and the tears gushed out like water from a rock. The vow that the wounded youth had made, the blighted man had come to redeem. His sin was expiated, the curse was gone from him; and, in the hour, when he had shed blood dearer to him than his own, a prayer, the first for years, went up to Heaven from the lips of Reuben Bourne.⁽¹²⁾

として Reuben の心は打ち砕かれ、自分より大切な者の血を流すことによって彼の罪は償われ、Reuben の祈りが天に昇ったとしてこの作品は終わっている。しかしながら、自分の息子の血を流したが故に Reuben の罪が償われたという印象を与えるこの結末には大きな疑問が残る。もし Reuben が自分の息子を殺した結果が自分の罪滅ぼしになると考えていたなら、彼は Dorcas に対し、‘This broad rock is the gravestone of your near kindred, Dorcas,’ . . . ‘Your tears will fall at once over your father and your son.’⁽¹³⁾ とは言い切れるものではなかつただろう。むしろ Reuben

がそのように考えられるとしたならば、18年間の苦悩の末に彼の精神状態は異常になってしまったと考えられる。Doubleday は、“The concept of Cyrus’s death as somehow a necessary sacrifice is certainly in no Christian: at the center of Christian belief is the assurance of a full, perfect, and sufficient sacrifice offered for the sins of the whole world.”⁽¹⁴⁾ と述べており、Reuben のような罪の贖いの考え方に対してはキリスト教的ではないことを明確にしている。Hawthorne 自身はどうであろうか。一度犯した罪の汚点は決して消えるものではないと信じる彼にとって、“His sin was expiated,—the curse was gone from him;”⁽¹⁵⁾ として罪の償いを片づけるには疑問が残るのである。Reuben の罪は Dorcas に真実を明かすことのできなかつた自らの“moral cowardice”に起因したものであり、それにより Malvin との約束を果さないまま自己の本心を欺き、徒に年月を送ってしまったのである。自分の弱さと自己欺瞞の結果が自らを孤立させ、陰鬱な自己本位の人間に変ってしまったのである。Waggoner が、“When he kills the child, then he is killing what he most loved, but he is doing more than that: he is killing the symbolic extension of himself”⁽¹⁶⁾ と述べているように、自分の最愛の Cyrus を殺すという行為は、18年間 Reuben の良心と魂を傷つけ、蝕んできた自己欺瞞という暗い罪の影を打ち消すことを意味しているのではなかろうか。自分を真実な光に照らさなかつた罪の報いが、同じ場所で18年後に自分の最愛の息子を殺すという宿命的な悲劇を招く結果となったのである。Hawthorne は人間の罪の結果が孤独を生み、孤独が人間性の喪失を導き、暗い宿命的な悲劇を迎えることを印象づけている。Fairbanks は Hawthorne の罪意識について言及する中で、“Hawthorne reflects the guilt-sense in various way. For one thing, he is acutely conscious of the need for confession . . . ‘Roger Malvin’s Burial’, is the earliest instance of preoccupation with this subject.”⁽¹⁷⁾ と述べている。これは罪に支配された人間がたどる悲劇の結末をなんとか救済の道へとする Hawthorne の悲劇のテーマであり、人間性の回復の要として

confession（罪の告白）をこの作品全体の中に裏打ちしていると思われるのである。つまりいかに暗い罪に覆われていようとも，“Be true! Be true! Be true!”⁽¹⁸⁾と主張する Hawthorne の姿勢がそのままあった上で、Reuben の悲劇的な罪の贖いの結末と見ることができると思われるのである。

さて、次に *Twice-told Tales* に収められている “Wakefield” では、主人公の Wakefield が傲慢な動機により、自らを孤独に追いやってゆくという結末になっている。19世紀の大都会ロンドンの都市空間の中で、一組の中年の夫婦の絆、また一個人と人間社会の見えない絆を浮き彫りにしながら、孤独と自己喪失に陥った Wakefield の、人間性の感覚が麻痺した危険性について描かれている。

Wakefield は結婚後10年も経ってから、田舎行き夜馬車で3、4日は帰らない旅に出かけると妻に話して出かける。当初は一週間程留守をして、良善な妻を困らせようとの企だったのであるが、結局自分の家の隣の通りにアパートを借りるのである。自分がいなくなれば模範的な妻はどんな影響を受けるのか。自分の存在感というものを妻に印象づけ、それをそっとわきから見て自己満足したい衝動に駆られる。彼は気づかれぬように赤い髪のかつらをつけ、全く違った服装に変身する。失踪後三週間して医者が妻のもとに駆けつけた際、その様子を外から見て感情の高まりを覚え、今は帰って妻の邪魔をする時ではないとして自分のアパートに戻ってしまう。この時帰らなければ、妻との絆は断ち切れると考えられるが、彼は自分の行動の異常性に気づいていない。Hawthorne は Wakefield の行動について、“Little knowest thou thine own insignificance in this great world! . . . It is perilous to make a chasm in human affection; not that they gape so long and wide—but so quickly close again!”⁽¹⁹⁾と手厳しく語っている。

さていつか家に帰ると思いながら10年の歳月が過ぎ、ロンドンの雑沓の中で痩せ衰え、浮浪者のようになった Wakefield は偶然にも群集の人込みの中で妻と顔をつき合わせ、お互いに顔を見合うのであるが、妻は自分の夫だとは気づかないまま教会の玄関に入ってゆく。Wakefield は慌ふためいて自分のアパートに戻り、部屋に鍵をかけ、初めて自分は気が狂っていると叫び出すのである。これが妻のもとを去って10年も経っている Wakefield の意識である。彼の最初の目的であった自分の存在価値を妻に知らせる計画はとっくに虚無化し、妻と世間から自らの存在を断ち切ったが故に、自分を全く孤立させる結果となり、孤独な狂人となりつつある。Arlin Turner は、“・・・Hawthorne explored the causes and the effects of isolation, and in each instance concluded that guilt is involved. When a man is separated from his fellowmen and the ties of human sympathy and affection are thus weakened or severed, he suffers accordingly.”⁽²⁰⁾ と述べているように、人間の絆を断ち切った孤独というものに罪が存在し、そのままの状態が暗い運命となるのである。Wakefield は自分の存在さえ空虚になっていることすら意識しないまま、更に10年間俺はやがて戻ると自らに言い続けるのである。

失踪後20年目のある夕べ、秋の夜の冷たい風雨の中、惨めな Wakefield は雨に濡れながら身震いし、彼は自分の虚栄心の企故に家に戻るきっかけをずっと断ち切ってきたが、実はその虚栄心の奥には自分の存在を相手に誇示しようとする高慢、つまり、箴言の「高ぶる目と驕る心とは悪人の光にしてただ罪のみ」⁽²¹⁾ という宗教的な罪が潜んでいたと考えられる。ヤコブ書に、「然れど今なんぢらは高ぶりて誇る。斯のごとき誇はみな悪しきなり。人善を行ふことを知りて、之を行はぬは罪なり。」⁽²²⁾ とある。Hawthorne は Wakefield のように、自分の存在がいかにつまらないもので、すでに霧のようにいつでも消えてしまう存在になっているにも拘らず、高慢な虚栄心と自己本位の無情の故に、自分の為すべき事を行わない様をも罪と考えていたのではないだろうか。Wakefield は冷たい雨に打たれなが

ら、雨宿りするぐらいの動機でそのまま暖かい暖炉の燃える家の中へと入ってゆく。彼は妻のもとに帰るといふ内的な意志行動によるのではなく、冷たい風雨という外的要因でしか家に戻れなかった程、自分の居場所を確認できず、自己喪失のまま妻のもとに帰ったのである。彼の妻が Wakefield をどのように迎えたかについては Hawthorne は読者に語っていない。作品の冒頭で、死ぬまで愛情ある連れ合いとなったとしているだけであるが、Hawthorne はこの作品の最後に、混乱しているように見える我々の神秘の世界も各個人は見事に組織的に調整されている故に、一瞬でも踏み外して脇へ逸れたら Wakefield のように、天涯の孤独となる危険性があるとして警告している。“Wakefield” においても主人公が自ら孤立してゆくプロセスにおいて、彼の思いの中に宗教的な罪が起因していたことが窺えるのである。

“Sylph Etherege” は *The Show-Image* に収められている短編で、この作品では世間に眼を向けようとしないで、自分の空想上の恋人だけを慕い求める乙女の孤独癖が描かれている。やや現実離れた作り話の感もあるが、人間の社会性と孤独を考える上でこの作品に触れておきたい。空気の精のような、ほっそりとした夢見がちな少女、Sylvia は子供の頃両親を失くしてしまいが、両親が決めた未だ見ぬ従兄のいいなずけがヨーロッパにいる。独身の叔父の世話で育ってゆくが、17才になった時、叔父の死後、裕福な Grosvenor 夫人に預けられる。Sylvia は自分のいいなずけの Edgar Vaughan と文通だけの関係だが、彼を美化しながら空想の中で二人だけの世界にひたり、彼女の周囲の人々との交流を自ら断ち切っている。Vaughan がヨーロッパから帰ってくるという時が近づいた時、Vaughan の友人の Edward Hamilton が彼女のところへ恋人の手紙を持ってくる。顔立ちの良くない Hamilton に対し、Sylvia は無愛想に手紙を受け取る。その後で Vaughan の完璧な程の美男の偽りの肖像画を Sylvia に手渡すのだが、実は

Hamilton と称して、Vaughan の友人になりすました男こそ、策略を企てた Vaughan だったのであり、作品の冒頭では、この肖像画を胸に抱いている Sylvia を、Vaughan と Grosvenor 夫人が遠くで秘かに眺めている場面から描かれている。Vaughan は、'Our pretty Sylvia's scorn will have a dear retribution!'⁽²³⁾ と口走っている。Vaughan はあまりにも現実世界に眼を向けようとしないうちに Sylvia に対して、Grosvenor 夫人の許可を得て策略を講じ、Grosvenor 夫人の心配をよそに Sylvia の夢心地の生活を終結させ、真実に直面させようとして現実の世界に彼女を引きずり降ろそうとしたのである。夢の恋人、Vaughan が帰って来るのを心待ちにしていた Sylvia の前に姿を現わしたのは、美男とは程遠い Hamilton だったのである。彼女のあまりの衝激に対し、彼は、'It was I that created your phantom-lover, and now I annihilate him! Your dream is rudely broken. Awake, Sylph Etherege, awake to truth! I am the only Edgar Vaughan.'⁽²⁴⁾ と策略を打ち明ける。ここで注目したいのは、彼がこの策略に対し、'Well, my conscience is clear.'⁽²⁵⁾ と言っている心境である。繊細極まる Sylvia を Sylph と呼んだ彼の謀はあまりにも無謀であり、無神経であったと言えよう。自分の策略に罪なしと言い切る意識の中に自らが感知し得ない罪が浮き彫りにされているのではなかろうか。

結婚式の前夜、Sylvia は笑みを浮かべながら、Vaughan に一方的な別れを告げてこの世から去ってしまう。Sylvia は最後まで空想上の恋人を追い求めてしまったのである。彼女の夢見がちな孤独癖が現実の人々の暖かい触れ合いから彼女を切り離し、人間性の欠陥から死を迎える結末となったのであるが、Sylvia の死というものは人間社会の絆の中に留まろうとせず、Sylvia が自ら死を選んだような印象を与えるものであり、生と人間社会を肯定しない態度は罪ということになる。

“The Ambitious Guest” という短編においても孤独な人間の生と死が極

端な程、教訓的に描かれている。ニューイングランドで最も荒涼とした山地を歩きながら旅をしている孤独な若者は、本来なら仲間になったと思われる人々からも、彼の高尚な用心深さから自らを世間の人々から隔絶させながら生きて来た。彼には心の奥に秘かな野心があり、有名にはなれなくても、自分がこの世で死ぬ時に、墓の中で人々から忘れ去られてしまう存在になることに耐えられず、生きた証しとしての自分の記念碑をこの世に残しておきたいという願望を持っていた。人里離れた山の人々の生活でも、駅馬車によって毎日世間との繋がりを保っていた。彼は一軒の山小屋に一夜の宿のために入ってゆく。暖炉を囲みながら、心暖まる平安な山の家族のなごやかな雰囲気、彼の心もほぐれ、自分の思いを家族の娘にも楽しそうに語っていた。家族の者達もやがてそれぞれの夢や願望を広げ始めていた時、急に山の地滑りが大きな地響きと共にその山小屋を襲い、不運にも逃げ出した方向に山崩れが奔流となって落ちて来て、その若者も山の家族も土砂に埋まって死んでしまった。山の家族は山小屋に残された遺品から山の住民たちによって思い出され、ずっと広く語り伝えられてゆくが、あの若者はその生も死も、彼の存在すら誰も知らない結末となっている。自分が最も耐えられないと考えていた不安が一瞬にして自分の身に振りかかったのである。Hawthorne は人の命と人の望みのはかなさを印象づけ、孤独な人間の死の空虚感を漂わせている。

Hawthorne の短編の中では、人間の絆を断ち切ってしまう孤独な心の状態には、人間の繋がりから孤立してゆこうとする動機や意志の中に、evil な罪が根底に潜んでいるという、彼の宗教的な確信が窺えるのである。短編“Ethan Brand”でも、山に籠っていた主人公が、山を下り、“Unpardonable sin”「許されざる罪」というものを人々の中に探し求め続けた結果、そのような行為そのものが、許されざる罪の行為だと自覚し、結局自己破壊への道を進むことになる。彼が自ら失ったものは、“magnetic chain of humanity”,⁽²⁶⁾ つまり、人間同志が共感を得て、お互いに磁石のように引き合う見えない鎖であったとしている。このように Hawthorne

は孤独というものを罪の生まれる状態だと考え、弱くて脆い人間がその罪から離れ、墮落や自己喪失をせずに生きるには、この見えない鎖に繋がっていることであると語っているのであろう。Hawthorne のそれぞれの短編の中に、孤独による宗教的な罪と自己喪失の因果関係を見ることができると思われる。

注

- (1) Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse*, ed. William Charvat and others, (Ohio State University Press, 1974), X, p. 337. 以下このテキストを *M. O. M.*, とする。
- (2) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (Boston, Mass.: G. K. Hall & Co., 1979), p. 272. 以下この文献を *R. G. S.*, とする。
- (3) *M. O. M.*, p. 348.
- (4) *Ibid.*, p. 348.
- (5) *R. G. S.*, p. 274.
- (6) *M. O. M.*, p. 349.
- (7) *Ibid.*, p. 350.
- (8) Hyatt H. Waggoner, *HAWTHORNE* (Cambridge Massachusetts: the Belknap Press of Harvard, 1971), p. 95.
- (9) Arne Axelsson, *The Links in the Chain* (stockholm: Acta Universitatis Upsaliensis, 1974), p. 96
- (10) *M. O. M.*, p. 351.
- (11) *R. G. S.*, p. 280.
- (12) *M. O. M.*, p. 360.
- (13) *Ibid.*, p. 360.
- (14) *R. G. S.*, p. 279.
- (15) *M. O. M.*, p. 360.
- (16) Hyatt H. Waggoner, *HAWTHORNE* (Cambridge Massachusetts: the Belknap Press of Harvard, 1971), p. 97.
- (17) Henry G. Fairbanks, *The Lasting Lonliness of Nathaniel Hawthorne* (Albany, New York: Magi Books, Inc., 1965), p. 53.

- (18) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, ed. William Charvat and others, (Ohio State University Press, 1962), I, p. 260.
- (19) Nathaniel Hawthorne, *Twice-told Tales*, ed. William Charvat and others, (Ohio State University Press, 1974), IX, p. 133.
- (20) Arlin Turner, *Nathaniel Hawthorne: An Introduction and Interpretation* (Holt, Rinehart and Winston, Inc. , 1961), p. 39.
- (21) 聖書 (文語訳), 箴言21章 4 節.
- (22) ヤコブ書 4 章16, 17節.
- (23) Nathaniel Hawthorne, *The Snow-Image and Uncollected Tales*, ed. William Charvat and others, (Ohio State University Press, 1974), XI, p. 112.
- (24) *Ibid.* , p. 117.
- (25) *Ibid.* , p. 118.
- (26) *Ibid.* , p. 99.